
四季と断末魔

ジミー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

四季と断末魔

【ZPDF】

Z5585D

【作者名】

ジミー

【あらすじ】

「季節」とに恋愛対象が変わるお話……。急な転校を強いられた主人公。だけどそこには以前の旧友がいて……。そこから始まる4つの恋物語。

プロローグ（前書き）

結構長くなる予定です。

プロローグ

列車の窓から空を見上げると、寂しい鉛色をしていた。

これから生活の拠点がここに移るんだと思つと、憂鬱になる。

父親が急遽転勤となり、この異郷の地へと引っ越さなければならなかつた。

当然仲良かつた友達とも離れる事になる。嫌だつたがこればつかりは仕方がない。

がたん、がたん、ごとん。
がたんがたん、ごと、がたん！

最近の列車は、揺れが少ないと思つていたけれど、今乗つてているこれは、かなり揺れている。

更には、平日の朝8時だというのに、乗客が少ない。1つの椅子に、座つている人が1人か、2人かだ……。それも、会社に行くために移動をしているサラリーマンではなく、私服姿の人たちだ。中には、子連れ親子もいる。

平日の朝に、どこへ行くんだと思つたけれど、5時ごろからずつと揺りれている俺は、退屈すぎて何も考えたくない。しかも、すぐ眠い……。

本当に突然だった。昨日の晩、父親が急に転勤になつたから、明日にでも引っ越すぞと言つてきた。用件だけを伝えた父親は、さつと自室に戻り、その日に終わらなかつた仕事を片付けに行つてしまつたようだ。

そんなもんだから、俺は友達に口クにさよならも言えず、メールだけで済ました。本当は、学校で会つて、色々と話したかった。

昨日の帰り際に友達に向かつて『また明日ね』と言つたが、その言葉は意味がなくなつてしまつた……。

母親は学校に電話をして、それだけで転校手続きを済ましてしまつていた。そして今日から通う学校にも電話をして、1日で転校、引越ししが決まつた。引越し先を聞いたとき、どこかで聞いたような地名だつたけれど、忘れてしまつた。

あとで地図で確認をしたら、かなりの距離があることが分かつた。

んで疑問が1つ。俺たち家族が住む家はどうなるのか。

答えは、なんとも都合の良いシナリオのようだ。新築の家が既に用意されているらしい。住んでいた家と土地は売りさばいて……。あとは良く聞いてないから分からないし、知りたくもない。

……つい最近、ほんの2週間前に学年があがつたばかりで、せつかく新しく仲良くなつた友達がいたのに、これからは誰一人とて知らない学校で過ぐれないといけないと思うと、不安を感じる。

気付けば、俺はもう眠つていた……。

第1章 旧友（前書き）

書き換える可能性があります。

第1章 旧友

トゥルルルルルルルルルル。プシュー。
列車が目的の駅に到着した。

……あれま、本当に寝ちまつたみたいだな。ちょっと前の記憶が
全くない……。

あるのはわけの分からん夢の内容だけだ……。

まあ、せつせとしないと電車のドアが閉まつてしまつので早く移
動してしまおう。親にもおいていかれそうだし……。

駅から少しで辺りを見渡す。……なんだろう、何故だかこの風
景に見覚えがある。

周りには家とか店とかの建物も多いが、木や鳥たちもいて自然も
ちゃんと残つている。

何か懐かしい気がする……。もしかして俺はここに来た事がある
のか？ 確か地名を聞いた時にも、同じような感覚になつていたが
……。

……なんとなく思い出してきた。

そうだ。俺はここに一度だけ来たことがある。確か、あの日だか
ら6年前だ。

あの日とは……。当時俺が小5の時、すんげえ仲の良かつた親友
と唯一呼べるべきやつがいた。そいつは、今の俺みたいに、突然転
校して行つてしまつた。その時は携帯なんか持つていなかつたし、

忙しかったのか電話一本もくれずに、あいつは去つて行つてしまつた。

だがしかし。何と転校していつた次の週の休みに再び俺の目の前に現れた。

その時には仲の良いと、本当の意味でいえる人はそいつしかいなかつたから、一瞬幻が見えたのだと思ったが、幻が俺の体に触れることなどできるわけがないから、目の前にいるそいつは本物なんだなと思った。

そしてそいつは、有無を言わずに俺を自分が引っ越した場所まで連れて行つた。その日は午後だつたし、電車で何時間もかかるところなので、つく頃にはもうとつくて日が暮れていた。

そいつの親が俺の家に電話をかけて事情を話して、まあ次の日も休みだから、一晩泊まらせてもらつて翌日遊んだんだ。

その遊んでいた場所と、今俺が歩いている道から見える景色は、ほとんど俺の記憶に一致している。

という事はなんだ。俺の転校先とそいつの転校先が同じだつて事なのか？ それは俺にとっては嬉しいな。一人でも知つている人がいれば、学校での環境も大きく違うだろうし、気も楽になるし……。なんといっても俺はそんな親友に会いたいわけでもあり……。

でもそいつの名前は忘れてしまつた。なんて言つたか……。確かに読みは難しかつたけれど、覚えやすかつたような気がする……。

そして、そのあまりにも難しい読みのせいで、かなり変なあだ名を付けられていたな。

良し、そのあだ名を思い出した。あだ名を思い出せば、自然と本名も浮かんでくる…。

ああ、懐かしい友達の事を考えていたら、いつの間にか今日から我が家となる家にたどり着いていた……。

第1章 旧友（後書き）

こんな小説を読んでくれてありがとうございます；w もし良かつた次話もよろしくお願いします^_^

第2章 新しい家

その家は、新築特有の木のにおいがした。聞いての通り、とても綺麗な家であった。まさか……本当にタダで住めるのか……！」？

「お父さんの仕事の人たちが用意してくれたのよ、この家」本当にまさかのようだ。俺の父親、恐るべし……！

「全く……！」の家残してさつさと出て行つてくれないかしら、あのダボ野郎……」

実はうちの夫婦仲は最悪だつたりもする……。

外見だけでもかなりの高級感漂う感じがする。

……さて、中に上がつてみるか……。

……やけに部屋数が多い。しかも無駄に部屋が広い。

今まで住んでいた家とはエラい違いだ。自分の部屋なんかなかつたし、居場所は家族全員が使うリビングしかなかつた。寝室は辛うじて一人部屋だが、狭くてとても自分の部屋にはできなかつた。

「翼は2階の右側の部屋を使いなさい。一番広いから」

「おお、マジか。マジで自分専用の部屋が手に入るのか。転勤バンザイ！」

「でも1階はリビングと浴槽と台所以外は全部お父さんの仕事部屋になるから、入っちゃダメよ？」

はいはい。……つてかこんだけの部屋数が全部仕事部屋になるつて……俺の父親はそんな大変そうな仕事に就いてたっけな？　もしかして、どつかの会社の部長ぐらいまで昇進してるのか？

……でも実はどん仕事やつてるかなんて知らない。興味はあるが、別にそこまで知りたいわけでもない。

「部屋割りは一いつちで済ますから、翼はわざと荷物を置いて学校に行きなさい」

母親は俺にそういう、学校までの地図を渡した。
しかし、良く見ると……これ、2万5千分の1の地図じゃないか。
……。
クソ……ちょっと細かすぎるではないか……。

時刻は9時40分。10時には学校に着かないとまずい。
でも学校は徒歩10分もかからない場所があるので、案外余裕だ。

学校までの道筋はほとんど一本道であるため、この見にくい地図を使うことなく歩を進められる。
早くこの街に慣れるためにも、地図に頼るのは良くないしな。

今は10時前なので、車もあまり走つておらず、歩行者もいなければ自転車もない。やはり転校生の身であるから、あまり人とはすれ違いたくない。もしも普通に8時半登校なんかしてたら、同じ制服を着ているやつらから嫌な視線が飛んで来るに違いない。そのぐらいなら、今一人で学校に向かって、一人で職員室まで行つて、先生に連れられて教室に入ったほうがマシだ。

現に今俺は、俺の理想どおりの転校に事が進んでいる。
……さあ、今日から通つ学校が見えてきたぞ……。

学校の周りには、桜の木が何本か植えられていた。時期はもう4月の下旬なのに、満開に近い状態で咲いていた。この地域だからだろうか、俺が住んでいた場所では既にもう桜は散っていた。

ビューッと強めの風が吹いて、花びらがヒラヒラと舞い落ちる。手を出してみると掌に花びらが落ちてきた。雪みたいだ……。

桜の花びらに打たれながら登校する風景は、なんとなく趣がある。しかも自分一人でだ。

校門まで来ても、誰とも会わなかつた。校門には警備員がいるのが普通だと思うが、この学校にはいないようだ。

俺はあんまり田は良くないから、結構近くまで来ないと、どんな造りになつてているか分からない。遠くからでも、ここは学校なんだとぐらいは分かるが、細かいところまでは良く見えないのだ。

……メガネがそろそろ欲しいと思う。でも、俺には似合わないつて、友達のメガネを借りてかけた時に言われた。…コンタクトはちょっと面倒だからしたくないが、もうそろそろ考えた方がいいかもしねれない。

やがてサー、サーと砂を擦るような足音が聞こえてきた。

「あ……あの、石河……翼君ですか？」

え？

いつの間にか田の前には、紺のブレザーを着た、髪の長い女の子がいた。

「誰なんだろ……俺のフルネームを知っているという事は、俺を知っている人なのだろうが、俺にはこんな綺麗な人の知り合いはない。」

「私、2年2組の月島 香織つきじま かおりといいます。クラスの委員長をやって、先生に転校生が来るから迎えにいって欲しいと頼まれました。あの……石河君ですよね？」

「ああ、なるほど。だから俺の名前を一方的に知っているわけだ。」

「うん、そうだよ」

「えつ へへへ、良かつた。うん、これからよろしくね！」

「ああ、うんよろしく」

「ところで学ランを着てるひととは、まだこの学校の制服もつてないみたいですね？」

「ああそりゃなんだ。昨日急に転校が決まつたから、まだ注文してないんだ」

「やっぱりそうですか。私達も今せつせつと急に転校生が来るって聞いたんですよ。昨日までは誰一人とてそんな情報入つたこと知らなかつたみたいですね。先生も」

そりや、転校の手続きを済ましたのが昨日の夜だから、この学校

の生徒にとつては今日の朝に情報が入るはずだからな。

「でもこんな中途半端な時期に転校つて大変だつたでしょ。何かあつたのですか？」

「いや、ただ父親が急に転勤になつたから引越ししただけだよ。別に実は宇宙人だとか、変な能力とかは俺持つてないから安心してね？」

「あはは……。私も別にそういう人探ししているわけじゃないから」

委員長は笑いながらも、ちょっと困ったような表情を浮きべた。

「ちょっと氣になつた事あるんだけど良いかな？」

「はい、何ですか？」

「あのさ、もしかしてこの学校つて校則緩い？」

「あ……なんで分かつたんですか？ 確かにすぐ規則は甘いと思ひますけど……」

「だつて君、金髪じやないか。染髪許す学校……それに中学ではまづないと思つけど」

「こ、これは地毛なんですうーーーーー！」

両手をじたばたされて訴えるこの子の仕草が愛らしくと思つ。多分しそつちゅうからかわれているような人なんだなと思つた。

「話は戻して、この学校は携帯持込も大丈夫なんですよ。さすがに授業中はまずいけど、休み時間に使用する分には問題ないのです」
義務教育でこれだけ甘くする学校はどうなのかと思つたが、もう考えるのが馬鹿らしくなつた。

「ということは、お菓子とかの持ち込みもOK？ IPodの持ち

込みも可?」

「もちろん。誰もが持つてきているものです」

既に予想をしていた答えが返ってきた。

学生にとつてはすごく嬉しい学校のように思えるだろ?が、比較的常識派な俺にとつては信じられなかつた。

「という事はこの学校は不良が多い? 校舎の窓を全部割つて回るような……」

「そんな人はいませんよ!」

……? 辻褄があつてないような気がする。

「そんな生徒は一人もいませんよ。学校長は生徒を信用して、色んなものを持ち込み許可していますから。授業中携帯使って注意された人の話なんて聞いたこともないし、見たと言う人もいません」

……それもそうか。

「さて、ちょっと長話しそぎましたね。先生や皆が待つています。校舎に入りましょう。私についてきてください」

俺は言われたとおり、これから一緒に勉強する事になるクラス委員長の後をついていった。

第3章 委員長（後書き）

ちょっとと氣へなつきました； これからちょっととずつ面白くなつてく
れると思います…。

第4章 つかみはOK? (前書き)

約1年半以上もの期間が開いての更新ですね。反省しています;
これから頑張れるだけ頑張りますので、どうか暖かい目でよろしくお願いします!

第4章 つかみはOK?

2年2組。下駄箱の横側にはそう貼り紙が貼つてあった。

どこの高校も、入り口はそう大して変わらないな。

扉を開け、靴を入れる。すると、何かがひらひらと落ちていく。

拾い上げてみると、“ 粕山 飛鳥さま” と書いてある。

「ああ…。ここ下駄箱、もともとは粕山 飛鳥もみやま あすかという人のだったんです。でも2年になるとすぐに中退してしまって……。とても人気があるので、ラブレターが毎日絶えなかつたそうですよ」

「そつなんだ……」

2年にあがつて中退とは珍しい。留年が決まって中退なら珍しくもなんともないけど。

「すゞく綺麗で、可愛らしくて、頭も良くて。気さくで明るくて、ちょっとおっちょこちょこだけど、良いことにあげればキリがないくらいの人なんんですけど。急なことでみんな寂しく思つてます。誰一人中退の理由は知らないようだ…」

「……」

俺には全然わからない話だけど、この人の像はうががえた。

「ところでこの手紙どうしようか」

「では私が預かっておきます」

委員長は俺から手紙を受け取り、大事そうにポケットにしました。
「教室は3階です。行きましょう」

「うん」

「緊張しますか？ やつぱりこつこつのは」
「まあな。でも君と話せて気が楽になったよ。やつていけそつな氣

がする」

「それは良かったです。あなたなら、すぐに打ち解けるでしょう」
目の前にはついに教室の扉が。とうとうやってきた。この時が。
一度深呼吸。気持ちを落ち着かせ、呼吸が整つたらすぐに開ける!
ガラガラガラ!

『…………』

教室のいたるところから俺への視線が痛い。
お、重い……。なんだこの空気は。

異常を読み取った担任の先生がようやく助け舟を出してくれた。
「あー待つてたよ。じゃあ早速さつき話した転校生を紹介する」

「石河翼です」

先生に促されるよりも先に、自分から名乗る。これ極意。
「石河君はとても面白くて、いい人ですよ」

委員長がそう笑いながら言って席に戻つていぐ。

「つは……ハードル上がったよ。

「まあ時間も時間だから、今は授業を始めよ。仲良くするようにな。席は……ひとまず月島の隣でいいだらう。教科書見せてやれ」

「はい」

てきぱきと物事が進んでいく。あれ、これで終わりでいいのか?
俺名乗つただけだぞ。

周りの人たちだつて落ち着きがない感じだ。

「担任の長谷川先生。教科は英語。だから今は英語の授業です」

小声で委員長がそう教えてくれた。

俺は内心慌てつつも、先生は授業を始め、周囲も勉強モードに入つてゐるから、とりあえずは俺もノートを広げ耳を傾ける。
こんなんでやつていけるのか、もの凄く不安だ。

その不安も、昼休みになるとすぐに解消された。なぜなら今俺の
周囲には、

「んで俺はサッカー部。楽しいぜ」

「俺軽音部。ドラムやつてるぜ。こうダンダンダンつて」

「石河君いなの？ いたでしょ 地元じゃあ！」

……俺はクラスの人たちに囲まれ質問攻めを受けているからだ。にして、普通はこうはならないだろう。この学校に転校してきたからこそ現象だ。

「……ようやく、またあの時のようになれんのかな。なあツバサ？」

「ああ……きつとなれるさ、ユウ」

ちょっと前までは名前も忘れてしまっていた古き友。部田裕の存在で。

英語の授業が終わつた後の休み時間。

「あの……さ」

何の前触れもなく、俺の目の前に一人の男がやつてきた。

「ツバサ……ツバサ、だよな？ 俺だよ俺、わかるだろ？..」

始めはピンとこなかつたが、男の目を見続けていたうちに、徐々に昔の記憶が蘇つてきた。

俺が一番好きだった頃のこと。その時にいつも俺の隣にいたのは、確かにこの男の目の主だった。

つまり、こういうことだ。

「ユウ……コウなんだな？！」

「おうよー、ユウ様だぜい！」

ガシツ！

ユウは俺に抱きついてきた。

周りは異様な目で俺たちを見ている。でも気にしない。だつて、6年ぶりの再会だぜ？

「ツバサ——ツバサ——」

「ブターーブターー。部田だからブターー」

ガシバシブシツ——！

迅速なパンチを喰らつた。

「いやいや、これでこそ……ブタだな」

「だからもう呼ぶなってー」いつから一度も呼ばれてないんだぞ！

「よつしゃこの俺が広めてやるよー」ブターー！

「てんめ、転校1日から調子乗るとはいい度胸だな。喰らえーーー！」

「！」

俺は自分に置かれた状況も忘れ、騒ぎに騒いだ。

あまりの騒々しさに、自然とギャラリーが集まつて、今に至るところだ。

第4章 つかみはOK? (後書き)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5585d/>

四季と断末魔

2011年1月16日14時29分発行